

「人文学系」研究評価報告書

(平成14年度着手 分野別研究評価)

名古屋大学文学部

大学院文学研究科

平成16年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構(以下「機構」)が行う評価は、大学及び大学共同利用機関(以下「大学等」)が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その結果を、大学等にフィードバックし、教育研究活動等の改善に役立てるとともに、社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の教育研究活動等について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構が行う評価は、今回報告する平成14年度着手分までを試行的実施期間としており、今回は以下の3区分で評価を実施した。

- (1) 全学テーマ別評価(国際的な連携及び交流活動)
- (2) 分野別教育評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)
- (3) 分野別研究評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)

3 目的及び目標に即した評価

機構が行う評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、教育研究活動等に関して大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、目的及び目標が、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、規模や資源などの人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的に整理されていることを前提とした。

分野別研究評価「人文学系」について

1 評価の対象組織及び内容

今回の評価は、設置者から要請のあった9大学の学部・研究科(以下「対象組織」)を対象に実施した。

評価は、対象組織の現在の研究活動等の状況について、原則として過去5年間の状況の分析を通じて、次の5項目の項目別評価により実施した。

- (1) 研究体制及び研究支援体制
- (2) 研究内容及び水準
- (3) 研究の社会(社会・経済・文化)的效果
- (4) 諸施策及び諸機能の達成状況
- (5) 研究の質の向上及び改善のためのシステム

2 評価のプロセス

- (1) 対象組織においては、機構の示す自己評価実施要項(分野別研究評価「人文学系」)に基づき自己評価を行い、自己評価書を平成15年7月末に機構に提出した。
- (2) 機構においては、専門委員会の下に評価チームと部会(後記研究水準等の判定を担当)を編成し、自己評価書の書面調査、ヒアリング及び研究水準等の判定の結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会で取りまとめ、後記3の「意見の申立て及びその対応」を経た上で、平成16年3月の大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

3 本報告書の内容

「対象組織の現況及び特徴」、「研究目的及び目標」及び「特記事項」は、対象組織から提出された自己評価書から転載している。

「評価項目ごとの評価結果」は、前記1の(1)、(4)及び(5)の評価項目については、貢献(達成又は機能)の状況を要素ごとに記述し、当該項目の水準を、以下の5種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- ・十分に貢献(達成又は機能)している。
- ・おおむね貢献(達成又は機能)している。
- ・相応に貢献(達成又は機能)している。
- ・ある程度貢献(達成又は機能)している。
- ・ほとんど貢献(達成又は機能)していない。

なお、これらの水準は、対象組織の整理した研究目的及び目標に対するものであり、他の対象組織との相対比較は意味を持たない。

前記1の(2)の評価項目については、研究内容及び水準の判定結果を割合で示している。なお、水準の割合は、教員個人の業績を複数の評価者(関連領域の専門家)が、国際的な視点を踏まえ客観的指標も参考として活用しつつ研究内容の質を重視して、判定した結果に基づくものであり、対象組織全体及び領域ごとに割合を示している。

前記1の(3)の評価項目についても、前記1の(2)と同様の判定を実施し、対象組織全体及び領域ごとに社会的効果の割合を示している。

「評価結果の概要」は、評価結果を評価項目ごとに要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について、その内容を転載するとともに、それへの対応を示している。

4 本報告書の公表

本報告書は、対象組織及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象組織の現況及び特徴

対象組織から提出された自己評価書から転載

1 現況

- (1) 機関名 名古屋大学
- (2) 学部・研究科名 文学部・文学研究科
- (3) 所在地 愛知県名古屋市
- (4) 学部・研究科構成
文学部 人文学科
文学研究科 人文学専攻
- (5) 学生数及び教員数

学生数

学部学生数 618名

大学院学生数 修士(博士前期)課程 136名
博士後期課程 171名

教員数 59名

人文学専攻

- (比較人文学講座) 教授3名 助教授1名
- (日本文化学講座) 教授3名 助教授2名 講師1名
- (哲学講座) 教授4名 助教授1名
- (言語学講座) 教授1名 助教授1名 助手1名
- (東洋学講座) 教授4名 助教授3名
- (日本史学講座) 教授3名 助教授1名
- (東洋史学講座) 教授2名 助教授2名 助手1名
- (西洋史学講座) 教授2名 助教授2名
- (美術史学・考古学講座)
教授2名 助教授1名 助手2名
- (日本文学・日本語学講座)
教授4名 助教授1名 助手1名
- (西洋文学・西洋語学講座)
教授4名 助教授3名
- (共通) 講師1名 助手1名

(6) 特徴

1) 本研究科は、文部省令第17号に基づく旧制学部として、昭和23年9月に設置された。創設時は哲学科、史学科、そして文学科の3学科6講座からなり教官14名、学生43名であった。翌年新制大学として再発足し、昭和25年には15講座となり、昭和40年には20講座となった。その間、昭和28年4月には大学院文学研究科が設置された。

平成7年には、第3年次編入学制度を導入し、人文学の専門的学習を志す者に門戸を開き、さらに平成11年には、大学院レベルにおいて社会人にも門戸を開いた。

その間、平成8年には、すでに学部構成は3学科26講座に成長していたが、課題領域を開拓するために講座間の連携を強化し、学部組織を大講座制に移行し、1学科12講座に統合再編した。また、平成12年には、中部地区における人文学の基幹研究科としての責任を担い、かつ先端領域に取り組むために、1学科12講座からなる学部組織を研究科とし、大学院重点化を達成して研究体制・研究支援体制を高度化した。その際、大学院専担講座として「比較人文学講座」を設置し、1学科13講座となった。翌平

成13年には、名古屋大学が全学をあげて推進している文理融合型研究拠点を支援し確保するため、心理学、地理学、社会学の3講座を「環境学研究科」に移行し、同時に研究科内において人文学の特化を図った。さらに平成15年には、学問のグローバル化や混迷する現代の諸問題に対応し日本研究部門を強化するために「日本文化学講座」を設置した。よって、現在の本研究科は、1学科11講座からなる。

2) 本研究科は、人文学を基礎学術基盤として位置づけ、人間的営為の諸相から人間精神の基層構造を明らかにし、文化的営為をその現象と体系化とのあいだで双方向的に理解すべく、人文学の適切なマネジメントのもと、先端的問題と基本的問題、あるいは専門プロパーの問題と学際的問題に思いをいたし、人間知のしなやかな発展を推進し、個別専門研究の高度化と先端的分野の充実、地域社会との連携、研究の国際化を図ることを基本目的としている。

3) 教官2名を最小単位とする類別された19の専門分野からなる本研究科に共通する公分母は、人間の文化的営為にたいして、現象面と認識面の両面から、第一次資料の分析に始まる堅牢にして柔軟なデシプリンを母体として、現代の問題を忘却することなく、知的解析を展開していることである。各教官はそれぞれの専門領域において通時的共時的な視点から先端的にして学際的な高度の研究を推進し、その成果をあげている。

4) 本研究科の先端的研究であるCOEプログラム「統合テキスト科学の構築」にみられるように、拠点形成と課程博士の育成にも積極的に取り組み、各講座もバックアップしている。

5) 研究体制・研究支援を支える資金は十分ではないが、平成12・13年度の教育研究拠点形成支援経費や科研費等の獲得などの努力をして成果をあげ、さらに競争的資金の獲得にむけて鋭意努力をしている。

研究目的及び目標

対象組織から提出された自己評価書から転載

歴史的に豊かな文化を育んできた中部地域の伝統を継承し、それに加えわが国第三の都市圏として東西の要衝に位置する名古屋大学の基幹的役割を自覚し、人間的営為の根底にあるものを常に問い、人文学の分野での諸課題を解決すると同時に、その人文学的知を未来に向かって開くことをめざし、以下のように目的・目標を設定する。

1 研究目的

(1) 基礎研究の継承と発展

人文学諸分野への多様な研究要請に応えるべく、哲学・史学・文学の伝統的基礎研究を基盤として、その継承的発展を図るとともに、現代社会の要請する先端的・学際的研究を推進する。

(2) 研究体制の構築

基礎領域と先端領域が双方向的に融合し、現代の新領域の課題にもすみやかに対処しうる、しなやかな研究体制と研究支援体制を確立する。

(3) 研究の高度化の推進

人文学の基幹研究科として最高水準の学問水準の維持と発展に寄与するために、研究の高度化を推進する。

(4) 研究の国際化の推進

人文学の体系的なマネジメントのもと、研究の国際化を推進し、人文学における、とくにアジア地域を中心とした国際的交流拠点を構築する。

(5) 研究成果の社会的還元

人文学を機軸とする世界の知の集積を社会に還元し、国際貢献を果たすと同時に、地域文化や歴史への理解を深め、研究等の知的サービスを活性化する。

2 研究目標

(1) 基礎研究の継承と発展

1) 研究科内の学際的連携を深め、人文学における多様な専門分野の拡充を図るとともに、アフリカ研究などの特色ある領域を発展させる。〔目的(1)(2)(3)(4)〕

(2) 研究体制の構築

1) 人的資源を広く求めるために公募制を促進する。採用者は就任講義をする義務を負い、研究改善に資する。〔(2)(1)(3)〕

2) 科研費などの外部資金の獲得を通じて、重点的に共同研究を推進するとともに、研究基盤と研究環境の整備を図る。〔目的(2)(3)〕

3) 研究の質の改善を図るために、定期的なピア・レビューと厳格な外部評価をおこなう。〔目的(2)(3)〕

4) 大学院生を第一線の研究教育活動に参加させるために、RAシステムの整備を図る。〔目的(2)(3)(1)〕

5) 海外調査や学会報告などの広域的な研究活動の支援体制を整備する。〔目的(2)〕

(3) 研究の高度化の推進

1) 活力ある研究者の構成を図りつつ、各専門分野における国際水準を見定め、高水準の研究活動をおこなう。

〔目的(3)(2)(4)〕

2) 人文学プロパーの研究を推進する、中部地域の基幹文学研究科として、人文学の諸分野において地域の研究活動を支え、地域学会の発展を図る。〔目的(3)(2)〕

3) 文書典籍の宝庫である中部地域に位置する基幹文学研究科としての研究実績に基づき、文献研究の統括化を図る。〔目的(3)(1)(5)〕

(4) 研究の国際化の推進

1) 史資料分析研究における分野での国際的な交流拠点を構築する。〔目的(4)(3)(2)〕

2) COEプログラム「統合テキスト科学の構築」を機軸にして、国際的な研究拠点形成をおこなう。〔目的(4)(3)(2)〕

3) 国際的学術誌の発行、国際シンポジウムの開催など専門研究の国際的推進を図る。〔目的(4)(2)(3)〕

4) 留学生の修士・博士学位取得を推進する。特にアジア地域の留学生に対して課程博士の学位取得の支援をし、東アジアの人文学のレベルの高度化に貢献する。〔目的(4)(3)〕

(5) 研究の社会的還元

1) 優れた高度専門職業人を養成し、人文学の知を社会の現場に広く還元し、浸透させる。〔目的(5)〕

2) 地域及び国際レベルにおける文化事業に協力し、研究成果を提供する。〔目的(5)(2)(3)〕

3) 研究科及び各専門分野において市民受け入れの研究会やシンポジウムを積極的に開催する。〔目的(5)〕

4) 中部地域に残された貴重な史資料や埋蔵文化財の整理とその情報公開を、地域ならびに学内機関の協力連携のもとにおこなう。〔目的(5)(2)(3)〕

評価項目ごとの評価結果

1 研究体制及び研究支援体制

この項目では、対象組織における「研究体制及び研究支援体制」の整備状況や「諸施策及び諸機能」の取組状況を評価し、その結果を「目的及び目標の実現への貢献状況」として示している。また、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

なお、ここでいう「諸施策及び諸機能」の例としては、学科・専攻等との連携やプロジェクト研究の振興、人材の発掘・育成、研究資金の運用、施設設備等研究支援環境の整備、国際的または地域的な課題に取り組むための共同研究や研究集会の実施方針、大学共同利用機関や学部・研究科附属施設における共同利用等のサービス機能などが想定されている。

目的及び目標の実現への貢献状況

【要素1】研究体制に関する取組状況

大講座制を基礎とし、総合人文学を中核とする4コース横断型の連携体制が構築されている点は、特色ある取組である。また教員採用における公募制の実施、及びリサーチ・アシスタントの積極的活用にも努力がみられ、研究組織の弾力化に関する取組は優れている。

大学院重点化の実現、全学的な観点からの研究体制の整備、学内連携組織への人材派遣、及び研究内容の内外への発信など、研究を活性化するための体制作りに向けた取組も優れている。

【要素2】研究支援体制に関する取組状況

文系総合研究棟の活用、全学の方針により改修総面積の20%を全学共用面積として利用するなど、研究支援のための施設・設備の円滑な利用が認められる。

また、21世紀COEプログラムの支援体制として、学内のみならず学外オフィスを設置することなどは、特色ある取組である。

【要素3】諸施策に関する取組状況

教員採用について公募制を採用し、出身大学も名古屋大学に偏らないようにしていること、また、選考の最終段階で同等の複数候補者が残った場合には、女性を採用するという申し合わせをしている事など、教員の男女構成比への配慮があり、人事関係の方策は優れている。

科学研究費補助金、21世紀COEプログラムなどに積

極的に取組み、予算の傾斜配分にも工夫が認められ、研究資金の獲得・配分・運用に関する方策は高く評価される。

東海・中部地域における人文学諸領域の研究拠点化は進んでいる。すなわち本研究科は、当地域において学会や研究会での中心的な役割をはたしており、講座を開催するなどの取組は優れている。そこでの研究者としての活動も、研究目的及び目標の実現に大いに貢献している。

研究環境の整備方針については、各種図書室の確保、情報ネットワークの管理などの取組が見られる。

【要素4】諸機能に関する取組状況

21世紀COEプログラムや共同プロジェクト等に対する施設設備の利用状況は相応と認められる。研究科内部における研究室の配置を見直し、コンピュータ室等も設置している。

【要素5】研究目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況

教職員、学生（特に大学院生）に対して、年度初めのガイダンス、Web、広報誌により周知をはかっている。また、サーバー管理を行う専任助手も配置されており、取組は相応である。今後は周知の結果を検証することが求められる。

学外者に対する公表の方法については、平成10年度に行われた「名古屋大学文学部創設50周年記念事業」として、種々の公開講演会、公開フォーラム、学術資料展を開催するなど、相応な取組と認められる。

この項目の水準は、「目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

特に優れた点及び改善点等

大学院重点化の実現、全学的な観点からの研究体制の整備、学内連携組織への人材派遣、リサーチ・アシスタントの積極的活用及び研究内容の内外への発信など、研究を活性化するための体制作りは優れている。また、教員採用における公募制の実施や教員の男女構成比への配慮なども優れている。

科学研究費補助金の獲得への積極的な取組も優れている。また、21世紀COEプログラムの推進などが高く評価できる。

東海・中部地域における人文学諸領域の研究拠点化は

進んでいる。すなわち本研究科は、当地域において学会や研究会での中心的な役割を果たしており、講座を開催するなどの取組は優れている。そこでの研究者としての活動も、研究目的及び目標の実現に大いに貢献している。

2 研究内容及び水準

この項目では、対象組織における研究活動の状況を評価し、特記すべき点を「研究目的及び目標並びに教員の構成及び対象組織の置かれている諸条件に照らした記述」として示している。また、教員の個別業績を基に研究活動の学問的内容及び水準を判定し、その結果を「組織全体及び領域ごとの判定結果」として示している。

また、領域ごとの判定結果を示すにあたって、以下の3区分による領域「哲学・思想系，社会学系，心理学系領域」，「文学系，言語学系領域」及び「史学系，人文地理学系，考古学・文化人類学系領域」で割合を示すこととした。

なお、業績の判定結果の記述の際に用いる「卓越」とは、当該領域において群を抜いて高い水準にあること、「優秀」とは、当該領域において指導的あるいは先導的な水準にあること、「普通」とは、当該領域に十分貢献していること、「要努力」とは、当該領域に十分貢献しているとはいえないことを、それぞれ意味する。

研究目的及び目標並びに教員の構成及び対象組織の置かれている諸条件に照らした記述

21世紀COEプログラムの「統合テキスト科学の構築」は、多分野の優れた研究者を結集し、テキストという共通のテーマの下で、先端的研究を推進するものであり、高く評価できる。高等研究院プロジェクトに採択された独創的な研究もあり優れている。

アフリカ，中国雲南多民族地帯，エジプト，アフガニスタンなど，世界の広範な地域を対象とした研究が展開されており，文献研究にとどまらず，フィールド・ワークが積極的に行われている点も，高く評価できる。特筆すべきこととして，保存修復を必要とする世界の重要遺産に関するいくつかの優れた著作・論文がある。

21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」，及び日本文学日本語学研究室の「比較語彙研究」の試みは，国際的な研究拠点にふさわしい取組として高く評価できる。

5年間における本研究科全体の論文数，著書数の多さは，注目される。

学術賞等の受賞状況については，全体として，一定の評価ができる。特に，日本学士院賞の受賞は評価に値する。

組織全体及び領域ごとの判定結果

(全領域)

研究水準については，構成員(教授32名，助教授18名，講師2名，助手7名，計59名)の1割強が「卓越」，6割弱が「優秀」，3割弱が「普通」，若干名が「要努力」である。

(哲学・思想系，社会学系，心理学系領域)

研究水準については，構成員(教授7名，助教授3名，講師1名，助手1名，計12名)の3割弱が「卓越」，5割が「優秀」，3割弱が「普通」である。

(文学系，言語学系領域)

研究水準については 構成員(教授13名 助教授9名，助手4名，計26名)の1割弱が「卓越」，6割弱が「優秀」，3割強が「普通」である。

(史学系，人文地理学系，考古学・文化人類学系領域)

研究水準については，構成員(教授12名，助教授6名，講師1名，助手2名，計21名)の1割が「卓越」，6割強が「優秀」，2割強が「普通」，若干名が「要努力」である。

3 研究の社会（社会・経済・文化）的効果

この項目では、対象組織における研究の社会（社会・経済・文化）的効果について評価し、特記すべき点を「研究目的及び目標並びに教員の構成及び対象組織の置かれている諸条件に照らした記述」として示している。また、教員の個別業績を基に社会的効果の度合いを判定し、その結果を「組織全体及び領域ごとの判定結果」として示している。

また、領域ごとの判定結果を示すにあたって、以下の3区分による領域「哲学・思想系，社会学系，心理学系領域」，「文学系，言語学系領域」及び「史学系，人文地理学系，考古学・文化人類学系領域」で割合を示すこととした。

なお、業績の判定結果の記述の際に用いる「極めて高い」とは、社会的に大きな効果をあげた非常に高い内容であること、「高い」とは、相当な効果をあげた内容であること、「相応」とは、評価できる要素はあるが必ずしも高くはない内容であることを、それぞれ意味する。

研究目的及び目標並びに教員の構成及び対象組織の置かれている諸条件に照らした記述

地域への文化的課題への寄与として、東海地域を中心にした史資料の調査や整理に本研究科の教員が積極的に参加している点は、高く評価できる。また真福寺文庫，岩瀬文庫に関する調査・報告は特筆される。

アフガニスタンの仏教遺跡，エル・サルバドルのチャルチュアバ遺跡，エジプトのアコリス遺跡などの国際的発掘調査を委託され，英文の成果発信を行うなど，国際貢献は顕著である。また，現地の学生の受入・指導も注目される。

組織全体及び領域ごとの判定結果

（全領域）

社会・経済・文化への効果については，構成員（教授32名，助教授18名，講師2名，助手7名，計59名）の若干名が「極めて高い」，4割が「高い」，4割弱が「相応」である。

（哲学・思想系，社会学系，心理学系領域）

社会・経済・文化への効果については，構成員（教授7名，助教授3名，講師1名，助手1名，計12名）の4割強が「高い」，4割強が「相応」である。

（文学系，言語学系領域）

社会・経済・文化への効果については，構成員（教授13名，助教授9名，助手4名，計26名）の若干名が「極めて高い」，3割強が「高い」，3割強が「相応」である。

（史学系，人文地理学系，考古学・文化人類学系領域）

社会・経済・文化への効果については，構成員（教授12名，助教授6名，講師1名，助手2名，計21名）の5割弱が「高い」，4割強が「相応」である。

4 諸施策及び諸機能の達成状況

この項目では、対象組織における「研究体制及び研究支援体制」でいう「諸施策及び諸機能」の達成状況を評価し、その結果を「目的及び目標の意図の達成状況」として示している。また、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

目的及び目標の意図の達成状況

【要素1】諸施策に関する取組の達成状況

人事関係の方策の実施状況について、公募制の採用、女性教員の比率の向上などは優れている。

外部研究費の獲得に関して、21世紀COEプログラムの採択は特筆されるものであり、また、科学研究費補助金の申請件数や採択件数が多いことも高く評価できる。

学会活動、公開講座等を通して、中部地域における人文学諸領域の研究拠点形成に成果が認められる。また同地域における文献センターとしての機能もはたしている。

研究環境の整備について、図書室やWebの整備などに改善が見られる。

【要素2】諸機能に関する取組の達成状況

研究科内、全学共同施設、学外オフィスなどに共同研究のためのスペースを設け、学外オフィスには研究員を常駐させており、共同研究に対するサービス機能は相応である。

また、研究集会等の開催実績については、21世紀COEプログラムのオープン・レクチャー、研究会、シンポジウム、講演会など、研究科全体としても各教員個人としても、極めて活発であり、優れている。

マスコミを通して、研究科の成果を広報するとともに、研究科に対する社会的要請の認知に努めていることは相応である。

この項目の水準は「目的及び目標の意図がおおむね達成されている。」である。

特に優れた点及び改善点等

人事関係の方策として、公募制の採用、女性教員の比率の向上など、実施状況は優れている。また21世紀COEプログラムの採択は特筆されるものであり、科学研究費補助金の申請件数や採択件数も多く、高く評価できる。

研究集会等の開催実績をみると、21世紀COEプログ

ラムに関するオ・ブン・レクチャー・やシンポジウム、講演会など、研究科全体としても各教員個人としても、極めて活発であり、優れている。

5 研究の質の向上及び改善のためのシステム

この項目では、対象組織における研究活動等について、それらの状況や問題点を組織自身が把握するための自己点検・評価や外部評価など、「研究の質の向上及び改善のためのシステム」が整備され機能しているかについて評価し、その結果を「向上及び改善システムの機能状況」として示している。また、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

向上及び改善システムの機能状況

【要素1】組織としての研究活動等及び個々の教員の研究活動の評価体制

自己評価、外部評価ともに早くから実施し、特に平成13年度にピアレビュー（専門研究者による審査）形式の外部評価を開始した。また就任講義を設けるなど、組織及び個々の教員の研究活動を継続的に評価する体制は優れている。

【要素2】評価結果を研究活動等の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況

各種の評価結果を個々の教員にフィードバックする方策が実施されている。また、総務委員会やワーキンググループを設置し、評価結果を踏まえ研究科全体の研究水準の向上に結び付けるための提言を行っていることは相応である。

この項目の水準は「向上及び改善のためのシステムがおおむね機能している。」である。

特に優れた点及び改善点等

自己評価、外部評価ともに早くから実施し、平成13年度には、ピアレビューの外部評価を開始するなど、組織及び個々の教育の研究活動を継続的に評価する体制は、優れている。

評価結果の概要

1 研究体制及び研究支援体制

大学院重点化の実現，全学的な観点からの研究体制の整備，学内連携組織への人材派遣，リサーチ・アシスタントの積極的活用及び研究内容の内外への発信など，研究を活発化するための体制作りは優れている。また，教員採用における公募制の実施や教員の男女構成比への配慮なども優れている。

科学研究費補助金の獲得への積極的な取組も優れている。また，21世紀COEプログラムの推進などが高く評価できる。

東海・中部地域における人文学諸領域の研究拠点化は進んでいる。すなわち本研究科は，当地域において学会や研究会での中心的な役割を果たしており，多くの公開講座を開催するなどの取組は優れている。そこでの研究者としての活動も，研究目的及び目標の実現に大いに貢献している。

以上の研究体制や研究支援体制に関する取組状況に比べ，研究目的及び目標の趣旨の周知や公表に関する取組は相応であり，今後のさらなる工夫が期待される。

この項目の水準は「目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

2 研究内容及び水準

21世紀COEプログラムの「総合テキスト科学の構築」は，独創的であり，本研究科の研究内容及び水準の高さを示している。

アフリカ，中国雲南多民族地帯，エジプト，アフガニスタンなど，世界の広範な地域における研究の展開は，高く評価できる。

さらに日本学士院賞を頂点とする種々の学術賞の受賞は，研究科全体の研究水準の高さを示しており，また研究論文数や著書数の多さも，特筆に価する。

哲学・思想系，史学系，文学系の中に国際的水準に達する優れた研究活動が見られ，高く評価できる。

3 研究の社会（社会・経済・文化）的効果

東海地域を中心にした史資料の調査・整理を通して，当地域の文化的課題に優れた寄与をしている。また国際的には，アフガニスタンにおける遺跡をはじめ，処処において遺跡の発掘調査を行っており，優れた社会的貢献といえる。

比較人文学の分野で幅広く社会的関心を喚起する独創的な研究が見られるほか，事典編纂，翻訳，通史叙述などによる基礎的人文学的知識の普及に資する研究活動が

認められる。

4 諸施策及び諸機能の達成状況

人事関係の方策として，公募制の採用，女性教員の比率の向上など，実施状況は優れている。また21世紀COEプログラムの採択は特筆されるものであり，科学研究費補助金の申請件数や採択件数も多く，高く評価できる。

研究集会等の開催実績をみると，21世紀COEプログラムに関するオ・プン・レクチャ・やシンポジウム，講演会など，研究科全体としても各教員個人としても，極めて活発であり，優れている。

この項目の水準は「目的及び目標の意図がおおむね達成されている。」である。

5 研究の質の向上及び改善のためのシステム

自己評価，外部評価ともに早くから実施し，平成13年度には，ピアレビューの外部評価を開始するなど，組織及び個々の教育の研究活動を継続的に評価する体制は，優れている。

しかし，これらの評価結果を，研究の質の向上や改善へと結び付けるシステムの機能状況は，相応である。

この項目の水準は「向上及び改善のためのシステムがおおむね機能している。」である。

特記事項

対象組織から提出された自己評価書から転載

1 本研究科は、伝統的な各専門分野からなる講座を基礎に、専担講座として「比較人文学講座」「日本文化学講座」を据えて、各専門分野を超えた先端的学問を推進すると同時に、伝統諸分野との双方向的な研究を推進しようとする体制を整えている。換言すれば伝統諸科学をその今日までに果たして来た意義、将来にわたっての基礎学問としての意義を認め、これを継承発展させていくという側面と、その厳密で詳細な学問的成果を基礎にそれらを統合しこれまでの研究を一新するような意図をもった研究を創造することを、体制的に保証しようとするものである。

2 COEプログラム

その具体的な研究の今日的表現の一つは、21世紀 COEプログラムである。

このプロジェクトは、「統合テキスト科学の構築」という共通テーマを設定し、言語、史料、文学・思想作品、画像、身体所作等を広く「テキスト」の概念によって、包括的に研究対象として選択している。かかる対象の産出とその表示する意味や機能を支配する普遍的原理を追究するのが本プロジェクトの目標である。

研究の推進は、研究科に属する教官がその専門分野における成果を持ち寄って参加し、その中心となっておこなうが、同時に研究科全体による支援を確認している。また各分野から専任の研究員を採用して一体となった研究を遂行することにより、若手研究者の育成にも配慮している。このことは採択理由に、「大学全体の将来構想と支援体制のなかに十分位置づけられており、若手育成のための計画にも十分な配慮が認められる」と指摘された。

定期的な研究報告会と年数回の国際研究集会を開催し、その成果を広く研究報告書として内外に発信することにより、国際的な研究拠点としての機能を充実させつつある。同時に、月一回程度の一般市民向けの講座を通じて成果を地域社会に積極的に還元する施策を実行している。

3 史資料の調査と活用

本研究科は中部地域の史資料調査に大きな業績をあげてきたが、近年特に注目されるのは、名古屋市にある真福寺文庫（大須文庫）の調査である。真福寺は『古事記』『漢書食貨志』など和漢の古典籍の宝庫として著名であり、14世紀以来集積・保存されてきた聖教・古典籍・古文書は約120函、15,000点に及んでいる。この文庫の内容は戦前、東京大学の黒板勝美博士によって調査されたが、戦後、初めて本格的に本学研究科教官が国文学研究史料館や愛知県と協力し調査をすすめている。

尾張は東西の接点で、木曾三川の合流地でもあり、海と陸の交通路の交わる所であって、こうした地理的条件のもと国宝をも含む貴重な史資料の宝庫となったもので

ある。こうした蔵書群の調査は現在継続的であるが、その成果は『真福寺善本叢刊』全12巻（臨川書店）、『愛知県史』資料編8中世1として発刊されている。これらは既存の歴史・宗教・思想の枠を超えて、見過ごされがちであった史料群が新たな意味を主張し、新たな人文学研究の対象を生み出すこととなるものと注目されている。同時にこうした史料群自体が従来の研究の一層の深化をも促すものと期待されている。

調査の中心をになう本学研究科教官は21世紀 COEプログラム「統合テキスト科学の構築」にも参加し、調査のみならずその多面的な意義を広範に発信すべく、COEとも連携して研究集会を開催している。

4 国際的な文化財の保護活動

本研究科の特色は、国際的な文化財の詳細な調査とその成果を基礎とした保護にも積極的に貢献をしている点にも現れている。

2001年3月、アフガニスタンの仏教遺跡バーミヤンは、タリバンによって二大仏をはじめ、多くの石窟に残る壁画も破壊されてしまった。この遺跡は周知のように東西文化交流史上きわめて重要な位置をしめるものであり、「世界遺産」に指定されている。今日その復元修復が世界的な規模で論議されているところであるが、本研究科に長年蓄積された研究成果が基礎資料として役立っており、研究をすすめてきた教官は「アフガニスタン国際協力会議」（文化庁主催）においても委員とし積極的な提言をおこなっているなどは、その一例である。

5 以上はその一端であるが、本研究科が伝統諸科学の継承・発展と同時に、それを基礎としたあらたな研究分野の創出、国内外における文化財保護とその意義の積極的な掘り起こしなど、人文学における基礎科学と先端的な学問との相互交流を活発に進めている姿は特記されるべき事項であり、将来にわたって展開が望まれる点である。